特279-14
1200601101917

考古圖集

始

國立國會圖書館藏書
I種
W
1200601101917

考古圖集解說　第三十一集

飛鳥時代古瓦號

本解說は高橋健自氏「飛鳥時代古瓦の研究」(聖德太子論纂)によりしもの多し。

飛鳥時代の瓦は百濟の手法を傳へたるもの多し。巴瓦はすべて蓮華文を現せるもの、之を圖樣より見て、中房小さく花瓣の長きものと、反對に中房著しく大きく花瓣濶く短きものとの二種に分かつべし。前者を單瓣式、後者は複瓣式といはんか。前者の簡素は、次の奈良時代に及んで形を潛め、後者の秀美のみ長く行はるゝに至れり。

(301) 飛鳥時代巴瓦

1は單瓣式中第一類の代表的のもの、大和飛鳥寺の巴瓦なり。蓮華文は薄肉を以て表し、中房は小さく蓮子六個あり、花瓣區は中心の一個を周つて配せられし五個の蓮子より發せる放射線によつて五等分せられ、それが更に各二等分せられ、之によつて都合十葉の蓮瓣を劃したり。而して各瓣尖の反轉を表せり。本瓦は飛鳥寺の金堂遺址と推考せらるゝ地點に於いて、地下三尺許にして發掘せられしもの、その手法百濟の故地朝鮮忠淸南道扶餘發見の巴瓦とよく似たり。而して之と同型式のもの立部寺(定林寺)遺址よりも發見せられたり。

2は單瓣式中の第三類に屬すべきもの、輕寺、卽ち大和國高市郡白橿村大字大輕にありしもの、今法輪寺といふ一僧庵辛うじて存在せり。本瓦は中房區が稍ゝ球面を呈し、その面を十字に交れる線にて區劃し、そこに各一個の蓮子を配したるを以つて異とすべし。巴瓦の中心に球面狀隆起を置くことは遠く支那秦漢時代に行はれ、降つて朝鮮の高句麗及び百濟の故地に於ても往々發見せらるゝを以て、本遺物はその手法を遠く彼に遡ることを得べし、なほ花瓣區に於て瓣端に特に高まりを見せたり。

(302) 飛鳥時代巴瓦

3は大和國高市郡飛鳥村大字奥山の久米寺より發掘せられしもの、比較的小さき中房に七個の蓮子を容れ、蓮瓣には細き輪廓ありて尖端反轉の意を表し、かつ其の厚肉の蓮瓣上に更に中房に接して小なる花瓣樣の小葉をつけたり。恐らくこれ雄蕊か。花瓣區と緣との間に一圈を繞らし、緣上には重圈文を表はせり。蓮華文の緣を重圈文を以て裝ふことは支那六朝時代及び朝鮮三國時代の佛像光背の彫刻に

1200601101917

も見るところなり。この型式のもの、なほ大和熊凝寺址・同山田寺址よりも發見せらる。通じて前記1 2よりも厚肉にして、單瓣式蓮華文の發達の極にあるものといふべし。假に之を第六類となす。

4は更に趣を異にせるもの、小なる中房は高く出で花瓣は細長くしてかつ瓣端に至るに隨つて隆起す、かの花瓣に於て各〻離れたるは特異の型式といふべし。瓣の中央に縦線あり。かつ各瓣の間、緣に近く一個づゝの珠文を配せり。かかる珠文の配置は朝鮮大同江面土城洞及慶州發見の古瓦にも見るところ、以てその淵源を察すべし。此の瓦は大和國飛鳥奥山廢見にしてかの蘇我の稻目が向原の宅を以て佛殿に充てしといふ大和豐浦寺より發見せられしものと同式なり、今これらを第七類とすべし。

(303) 飛鳥時代巴瓦

5は大和法隆寺發見、1と同じく第一類に屬すべきもの、之を1に比するに中房稍〻高く、花瓣が普通の例の如く八枚にして、瓣尖細部の手法、稍〻前者と趣を異にして、瓣端圓し。かかる手法のものは、朝鮮慶州發見新羅時代の唐草瓦に竝列せるところなり。かゝる手法のものは、大和法起寺よりも發見せらる。

6は大和法隆寺發見のもの、中房は小さく、六個の蓮子あり、花瓣の數は九、普通見る蓮華文の如く偶數ならず、かつ各瓣の大小不同、各瓣端も不自然なる鈍角より成り、少珠文を配せり。これ瓣尖の隆起を意味せるものならん。これと同型式のものは大和飛鳥寺・中宮寺及び豐浦寺等飛鳥時代創立の寺地より發見せらる。通じて之を第二類となすべし。

(304) 飛鳥時代巴瓦

7は山城八阪法觀寺發見。稍〻厚肉の單瓣式にして、第五類とす。中房は磨滅して蓮子の數判然せざるも、瓣面に稍〻鎬をつけたるを以て雄健の趣あり。緣に斜面を構成せる鋸齒文をつけけり。法觀寺の創立については、何等文獻の徵すべきなし。

8は大和奥山久米寺發見、恐らく7の如き第五類と、3の如き第六類との中間型式なるべく、已に各蓮瓣上に子房に接して小葉あり。瓣尖の形狀は7に似たるも、蓮瓣に輪廓あり。これに似たるもの大和國磯城郡久山村吉備廢寺よりも發見せらる。

(305) 飛鳥時代巴瓦

9は土佐比江村發見、かゝる僻地に本時代の古瓦あるを異とすべし。中房區の著しく大なるは他の遺物に稀に見るところ、後述すべき複瓣式の影響と見るべきか。八瓣に分かれたり。各瓣の界線粗大にして、而して緣小さく、雄大の趣を具へしと見るべし。

第一類と第六類の中間型式とすべきか。

10は奥山久米寺發見、5と同型式なるべし。

(306) 飛鳥時代巴瓦

11は大和輕寺發見、中房は輕く球面をなし、八葉の蓮瓣は末端稍〻反轉し、瓣間の楔狀突起は著しく發展せり。第四類となすべし。この種花瓣の手法は法輪寺巴瓦大野丘北塔址及び奥山久米寺よりも類品發見せらる。12は法隆寺巴瓦、中房區の手法明かならず、花瓣區は、第一類に類する蓮瓣面に忍冬系文樣を高彫に表はせり。かゝる手法のものは朝鮮慶州發見のものに見るべく、我にあつては名古屋市尾頭願興寺及び河内野中寺發見のものに之を見る。13は大和法隆寺發見、第一類なるべく、14は大和飛鳥寺發見、6と同じく第二類に屬すべし。

(307) 飛鳥時代巴瓦

複瓣式蓮華文は通じて二類に分かつべし。15は大和法隆寺發見、之を第一類となす。中房は大きく十九個の蓮子を容れ、八葉の濶大なる蓮瓣が末端に於いて反轉の狀を呈し、各瓣面には雄蕊の便化せしと見るべき一雙の小葉を配し、緣に波文帶を置けり。なほ全面を見るに、中房區は高く、花瓣區は次第に傾斜し、瓦面凸曲面をなせり。

16亦法隆寺發見。

(308) 飛鳥時代巴瓦

17は大和熊凝寺發見、蓮子の數二十一個の多きに達せり。16と似て稍〻形式に捉はれ、勁健の趣を缺くものあり。18は法起寺發見、蓮子の數、更に增して二十五個となれり。共に第一類。第二類は第十六集古瓦號にのせし大和穴闇寺(または長林寺)發見、大體に於いては、第一類と相似たるも、細部に於て異なれるものあり。卽ち中房高く、瓣面が凸曲線をなせるは第一類に似たるも、瓣面に於ける二小葉は斷面圓味を有して優しく、緣の波文が線によらずして面によつて構成せられたり。

複瓣式蓮華文は支那及び朝鮮に於ても、我が飛鳥時代のものゝ母體となるべきもの極めて少きが如く、主として單瓣式行はれしが如し。隨つて我が飛鳥時代に於ても、單瓣式の起源のより古きものありといふべく、かつ數に於ても多きを見る。

(309) 飛鳥時代唐草瓦

19は山田寺發見の唐草瓦、本時代の唐草瓦は變種に於て乏し。之れ瓦の母國たる支那に於ては、古くより巴瓦にはその圖案に工夫を凝らせしが、唐草瓦に當るものは、殆んど無裝飾といふも可なるが如き單純さなりしが爲めならん。當代の唐草瓦文樣は二類に分かつべく、一は本瓦の如く只重弧文を以てせるものなり。本類の中にて、古式と見るべきは、縱斷面に於いて、正面より後方に向て自然と厚さを減ずるもの、輕寺發見の三重弧文のものゝ如きなるべく、更に縱斷面に於いて前端に所謂頤のある類のものあるべし。本瓦の如きは之れなるべく、類品は立部寺・巨勢寺・日向寺・川原寺・紀寺等數多く、かつ次ぎの時代にも及べり。20は大和法隆寺發見、唐草瓦の第二種たる忍冬唐草文を現せるもの、斷面に所謂頤なし。文樣は大體左右均勢なるも、敢へて之に拘束せらるゝことなく、縱横奔放、活躍の氣溢れたり。21は第一種重弧文系の變種となすべし。大和國高市村白橡村大字久米の久米寺より發見せるもの、頗る原始的のものあり、卽ち重弧文の表面に×と〇との兩帶を施し、かつ下邊に不規則なる凹凸あり、まさに高句麗時代の將軍塚大王塚のものに類せり。

(310) 飛鳥時代唐草瓦

22は東大工學部藏、大和法輪寺發見、23は高橋健自氏藏、法隆寺發見、24は伊藤篤太郎氏藏、法輪寺藏、25は26の裏面を示せるもの、26以下は28の東大工學部藏なるを除くの外、皆高橋健自氏藏、26は法隆寺發見、一種の忍冬唐草文を描けり。27は大和熊凝寺發見、28は大和法隆寺發見、29は大和山村廢寺發見、30は大和法隆寺發見、31は大和熊凝寺發見、共に忍冬唐草文を現せり。

以上三十三點の外、當代瓦と目すべきものは、本考古圖集第九集に大和奥久來寺發見の鬼瓦、第十六集に前述せる大和穴闇寺發見の複瓣式蓮華文の巴瓦をのせたり。之等を通じて見るに飛鳥時代の古瓦は次の如く分つを得べし。

- 唐草瓦
  - 重弧文
    - 第一類：19
    - 第二類：21
  - 忍冬唐草文：20 22 23 24 25 26 28 29 30 31 32 33
- 巴瓦
  - 複瓣式蓮華文
    - 第一類：15 16 17 18
    - 第二類：第十六集所載穴闇寺發見
  - 單瓣式蓮華文
    - 第一類：1 5 9 10 12 13
    - 第二類：6 14
    - 第三類：2
    - 第四類：11
    - 第五類：7 8
    - 第六類：3
    - 第七類：4

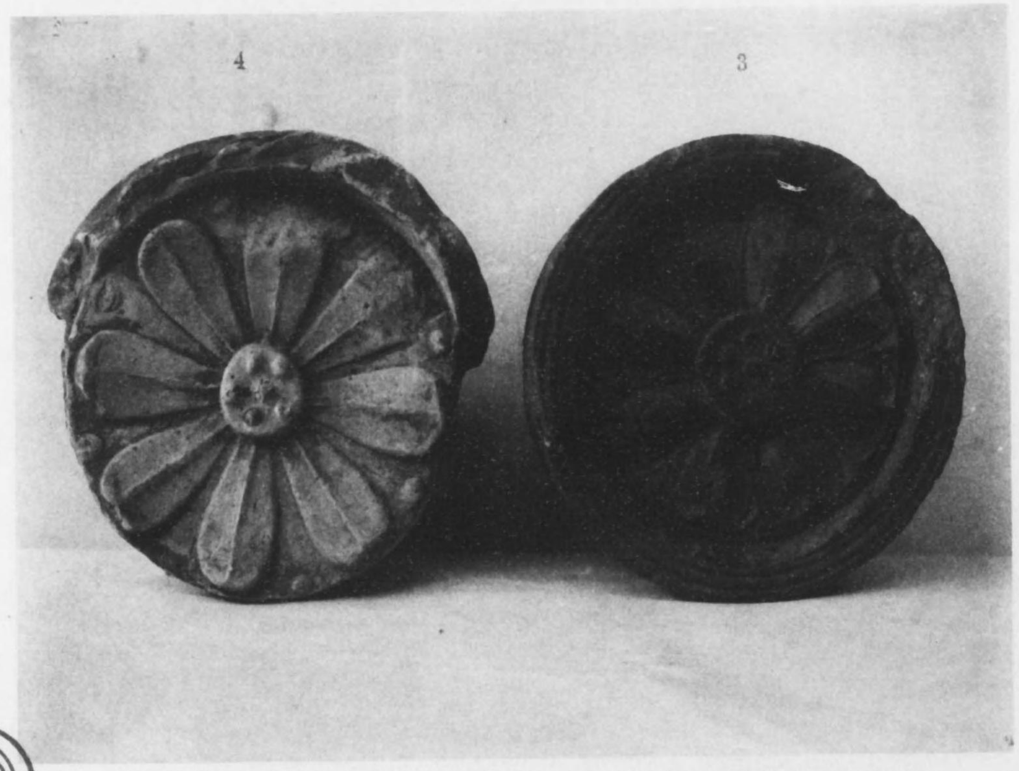
瓦巴代時鳥飛

（高橋健自氏藏）

第三十一集（飛鳥時代古瓦）

1200601101917

瓦巴代時鳥飛
（東京帝室博物館藏）



第三十一集（飛鳥時代古瓦號）

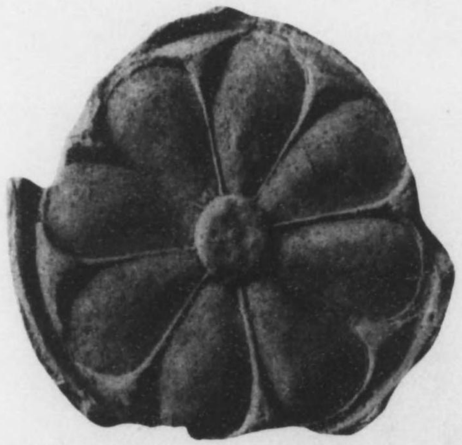
1200601101917

瓦巴代時鳥飛

（藏氏樞中山）

6

5

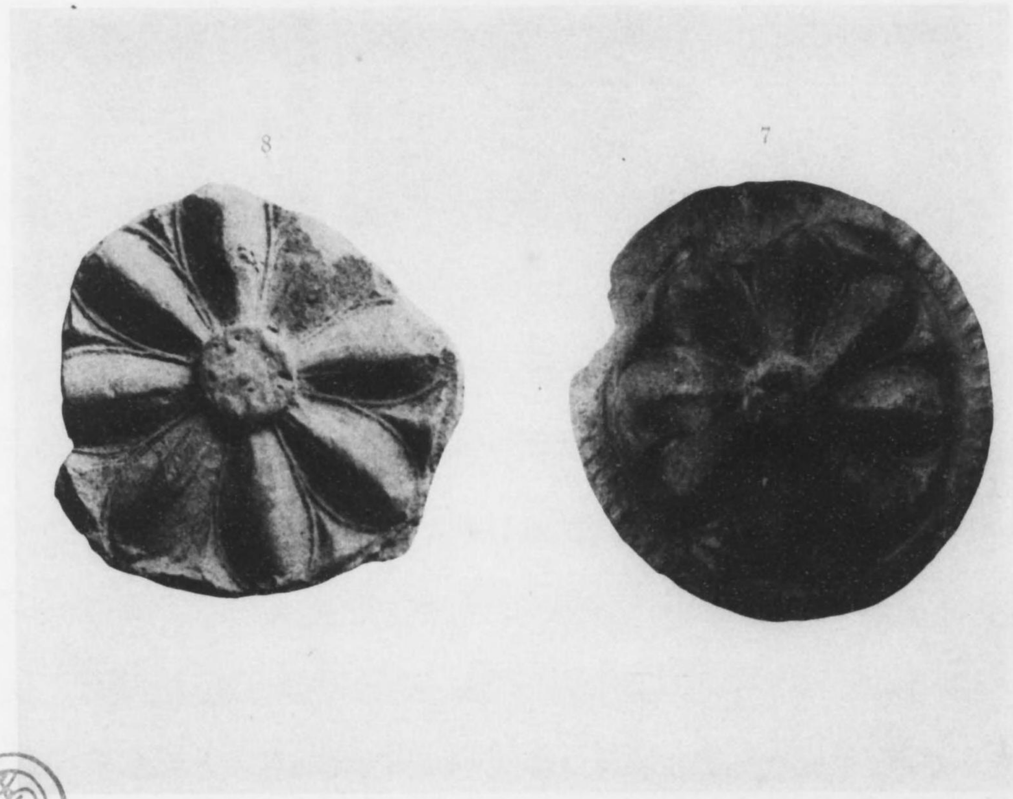


第三十一集（飛鳥時代古瓦）

1200601101917

瓦巴代時鳥飛

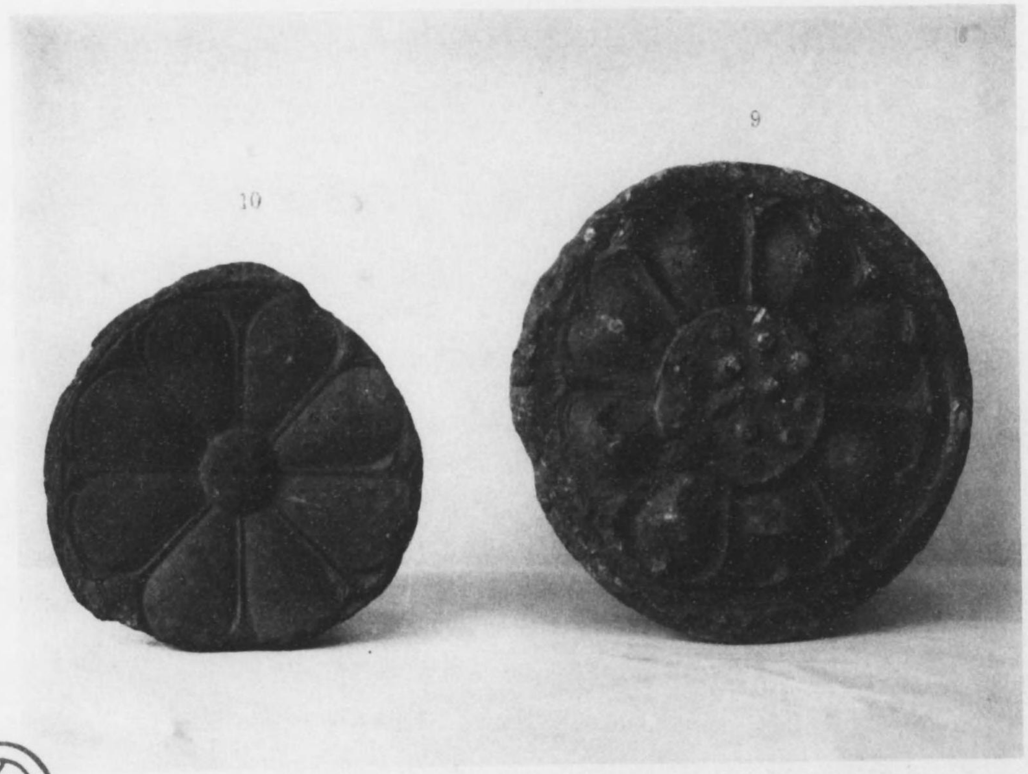
（藏部學工大京 左）（藏廳府都京 右）



1200601101917

瓦巴代時鳥飛

（東京帝室博物館藏）



第三十一集（飛鳥時代古瓦號）

1200601101917

瓦巴代時鳥飛

（藏氏自健橋高）

13

11

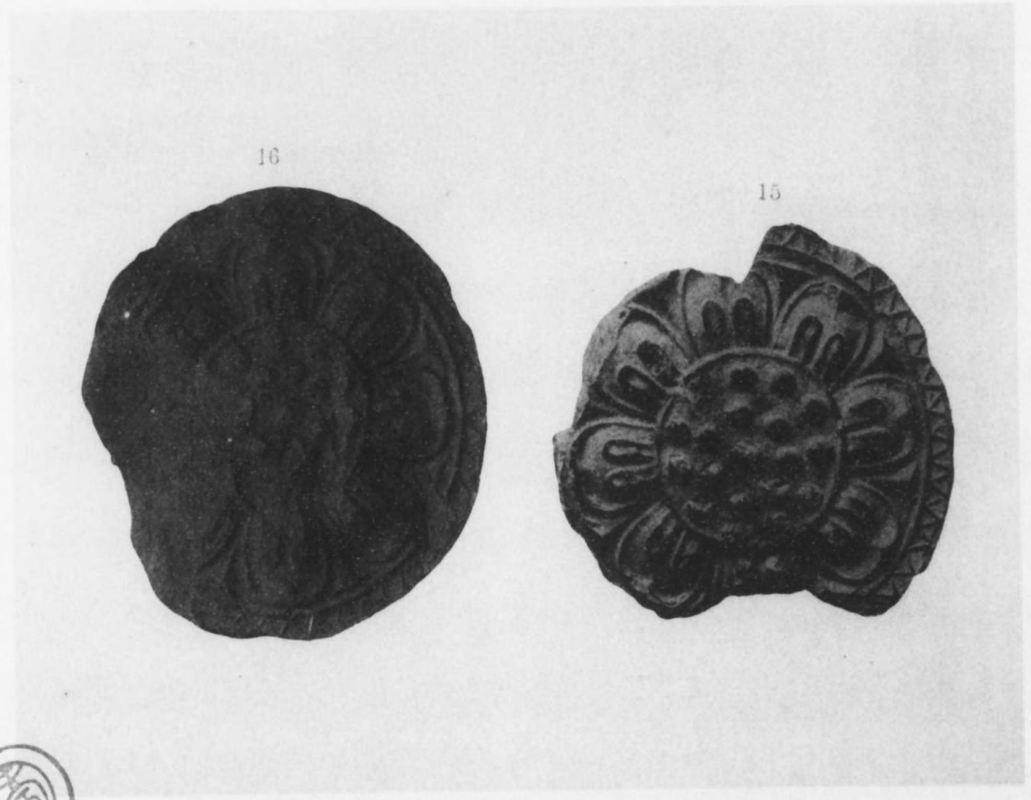
14

12

1200601101917

瓦. 巴代時鳥飛

（藏氏自從橋高 左）（藏氏郎次良村奥 右）



1200601101917

瓦巴代時鳥飛

（藏館物博室帝京東 左）（藏部學工大東 右）

18

17

1200601101917

飛鳥時代唐草瓦

（上 高橋健白氏藏）（中 東大工學部藏）（下 東京帝室博物館藏）

19

20

21

1200601101917

23

22

25

24

27

26

29

28

31

30

第三十一集（飛鳥時代古瓦類）

1200601101917

大正十二年七月七日印刷
大正十二年七月十日發行

編輯兼發行者　東京市下谷區上根岸町八十八番地　考古學會
代表者　東京市下谷區上根岸町八十八番地　高橋健自
印刷者　東京市神田區淡路町六番地　大塚稔
印刷所　東京市神田區淡路町六番地　大塚巧藝社
發賣所　東京市本郷區龍岡町三十四番地　聚精堂

不許複製

終